

Contents

2008年APEC研修コースを実施して

20万分の1地質図「屋久島」の成果普及
—屋久島研究講座および屋久島高校での講演—

第7回地圏資源環境研究部門成果報告会
開催報告

つくば科学フェスティバル2008出展報告

平成20年度埼玉県地震対策セミナー

I*Yシンポジウム「IGYから50年—最新情報技術
と地球・太陽科学—」

UNGIWG9 Open Day 参加報告

「公開地質地盤情報データベースの活用と将来
展望」報告

「地質の日」ロゴ決定!

スケジュール

編集後記

2008年APEC研修コースを実施して

森田 澄人 (地質調査情報センター)

地質調査情報センターでは2008年11月7日から25日までの期間、APEC研修コース「Human capacity building for natural hazard mitigation in cities and coastal regions: 都市と沿岸域における防災」を開催しました。本研修コースはAPEC (Asia-Pacific Economic Cooperation) プロジェクトの一環であり、昨年APEC本部に提出したプロジェクト提案が採択されたものです。初夏の頃、APEC加盟国に広く研修参加者を募集し、最終的に6カ国から以下の9名の研修生が採択され、産総研に招待されました。

Ms. Estu Kriswati (インドネシア), Ms. Tippawan Suttisuk (タイ), Mr. Mathew Moihoi (パプアニューギニア), Mr. Kila Mulina (パプアニューギニア), Ms. Mabelle T. Cahulogan (フィリピン), Mr. Alvin Lucio Mina Fernando (フィリピン), Mr. Phan Van San (ベトナム), Mr. Nguyen Cong Thuan (ベトナム), Mr. Qalam A'zad Rosle (マレーシア)。

彼らの専門は火山学や地震学、またはマッピングが中心で、日頃からフィールドワークに勤んでいる研究者が多いようです。初日の午後には研修生によるエコノミーレポートが行われ、各研修生の自国における自然災害や防災への取り組みについて発表が行われました。同日夕刻に行われた歓迎パーティーはたいへん盛況でした。エコノミーレポートを終えた研修生たちは、とてもリラックスした様子でこれから始まる研修に向けて大いに抱負を語っていました。

本研修コースはテーマに掲げるとおり、火山や地震、地すべりや海岸浸食などの災害を起こしうる自然現象のより良い理解と、それに対応する予防策や被災の軽減など、防災に焦点を絞った講義内容で構成されました。研修コースの全日程を表に示します。ほとんどの講義はGSJの研究者によって講義室で行われましたが、他にも大学から講師を招聘したり、研究機関などに出向いて直接講義を賜ったり、また野外に出て実地研修となるフィールドセミナーも開かれました。どの講義も非常に内容が濃く専門性が高いため、研修生たちが



写真 開会式での記念撮影。

速報

日本ジオパーク決定

第4回日本ジオパーク委員会(12月8日)で、7つの地域が日本ジオパークとして認められました。

アポイ岳・洞爺湖有珠山・糸魚川
・南アルプス(中央構造線)・山陰海岸・
室戸・島原半島

皆真剣に講義に取り組んでいる様子が印象的でした。

招待講師として参加していただいた日本大学の竹村講師には、含水率の変化によって地盤の粘性や強度に変化が起こる様子について実験を交えながら解説していただき、また筑波大学の田中教授には火山噴火による噴煙の移動を手軽にシミュレーションできる独自のウェブサイトを紹介していただきました。このような体験型の講義は特に研修生に好まれました。

海外からの唯一の招聘講師として、オレゴン大学のRay Weldon教授に來所いただき1日講義をしていただきました。Weldon教授はサンアンドレアス断層沿いの地震予測を実施しているWGCEP (Working Group on California Earthquake Probabilities) で、活断層調査からの地震評価を担当しています。講義の終了後、教授には全員を食事に誘っていただき、講義とはまた違った雰囲気できれいに歓談ができました。

防災科学技術研究所を訪問した際には、地すべり(講師: 酒井氏)や地震動予測図(講師: 郝氏)の講義を拝聴するとともに、リアルタイムで日本中の自然地震の観測データが集まってくるHi-netシステムを見学したり、大型降雨実験施設で実際に降雨実験を体験することができました。

一日東京を訪れた日は、午前には東京大学地震研究所を、午後は新宿の東京都防災センターを訪問しました。地震研究所では佐竹教授の津波に関する講義を受け、その後、製作中の海底地震計が数十台並んだ製作ラボの作業現場や、新研究棟地下にある特殊ラバーで支えられた免震構造の基礎を見せていただきました。都の防災センターでは災害対策本部室を訪れ、元東大地震研の笹井主任に東京都における地震や火山噴火、または水害や伝染病などあらゆる防災対策についてご説明をいただきました。緊密な他機関との連絡体制、または大規模な地下排水システムの整備や、万が一、災害時に新宿の対策本部が機能しなくなった場合には立川地域防災センターが直ちに代替本部として立ち上げられるよう準備されているなど、細やかに整備された防災対策に研修生たちは興味をそそられていました。

フィールドセミナーは、日帰りの九十九里方面と、2泊3日の諏訪・富士山方面の2回にわたって実施されました。ほとんどが地質屋で構成される研修生たちはフィールドに出ると一段とハッスルし、元気があり余るほどでした。九十九里海岸では、同じ海岸線における堆積場と侵食場の違いを地形や碎屑粒子の変化、地元の展示物などで学びまし

た。また広大な砂浜に驚きの声もありました。諏訪方面では、長野県富士見町の釜無山断層群のトレンチ調査現場を見学しました。滅多に見られない断層露頭を前にすると、緩んだ足元もものともせず、ネジリ鎌を手にして議論に花を咲かせました。研修の最後の場となった富士山方面は非常に晴天に恵まれ、終始富士山の山頂を望むことができました。バスで五合目まで到達すると、そこから宝永火口まで徒歩でアプローチし、火山噴出物の多様性と層序を観察しました。氷点下でしたが、日差しが強かったため予想していたほどの厳しい寒さもなく、全員が元気に歩き続けることができました。

研修コースの期間中、3度の週末がありました。研修生は皆さくら館に滞在し、週末には各々つくば市内や東京などを散策した模様です。最終日の修了式を含めた送別パーティーではすっかり緊張が解けたようで、皆全日程を終えた充実感と自国へ帰れる喜びで興奮した様子でした。全行程が順調に進行し、私達事務局も非常に充実した研修コースを実施できたことに満足しています。また、このように新しい技術と情報を特にアジア諸国などの他国にも伝えていくことの重要性を強く感じました。

本研修コースは準備期間からGSJとその他の機関の多くの方々にご協力をいただきました。本研修に携わっていただいた皆様に深くお礼を申し上げます。

日付	午前	午後
11/6 (木)	産総研到着	
11/7 (金)	開会式(挨拶: 加藤碩一 GSJ代表) オリエンテーション 脇田浩二・森田澄人 地質標本館見学 青木正博 館長	エコノミーレポート 歓迎パーティー (18時~)
11/8 (土) - 9 (日)	休日	
11/10 (月)	過去の地震による未来の地震予測 杉山雄一	活断層評価と地震動予測図 粟田泰夫
11/11 (火)	関東沖積層の地質と防災 木村克己	液状化と地震動の増幅 竹村貴人 (日本大文理学部)
11/12 (水)	地震地下水 小泉尚嗣	防災科学技術研究所見学 酒井直樹・郝 憲生 (防災科技研)
11/13 (木)	カリフォルニアの地震予測とリスクマネージメント Ray Weldon (オレゴン大学)	
11/14 (金)	フィールドセミナー1 (日帰り) 九十九里の海岸侵食 田村 亨・齋藤文紀	
11/15 (土) - 16 (日)	休日	
11/17 (月)	東京大学地震研究所見学 地震と津波予想 佐竹健治 (東京大)	東京都防災センター見学 都の防災システム 笹井洋一 (東京都)
11/18 (火)	GSJの地質情報とGeo-Grid 宝田晋治 衛星データと演算法による地すべり検知 Joel Bandibas・川畑大作 演算法による重力分布図の補間法 Joel Bandibas・宝田晋治・阪口圭一	衛星データを用いた地盤沈下モニタリング 佐藤 功 衛星データを用いた火山モニタリング 浦井 稔 衛星データを用いた地震地域マッピング 松岡昌志
11/19 (水)	火山噴火による降灰被害 須藤 茂・高橋和雄 (長崎大)	PUFFモデルによる火山灰ブルーム予測 田中 博 (筑波大) 火山モデル実験1 高田 亮
11/20 (木) - 22 (土)	フィールドセミナー2 (2泊3日) 活断層とトレンチ調査 丸山 正 富士・箱根火山 高田 亮	
11/23 (日) - 24 (月)	休日	
11/25 (火)	最終討論・レポート 火山モデル実験2 高田 亮	修了式(挨拶: 栗本史雄 地質情報研究部 部長) 送別パーティー (18時~)
11/26 (水)	産総研 出発	

表 研修コースの全日程。

20万分の1地質図「屋久島」の成果の普及 —屋久島研究講座および屋久島高校での講演—

小笠原 正継・斎藤 眞・下司 信夫（地質情報研究部門）

屋久島はその貴重な生態系が評価され、1993年に世界自然遺産に登録された。屋久島の自然を理解するのに、地質は重要な要素となっているため、屋久島ではエコツアー等のガイドをはじめ多くの方が地質・岩石に関する興味を抱いている。屋久島の地質情報として産総研地質調査総合センターからは、平成19年に20万分の1地質図「屋久島」が公表され、また平成20年には地質標本館グラフィックシリーズNo.9「屋久島の地質」が印刷された。これらの成果の紹介を屋久島で出来ないかと検討していたところ、屋久島地学同好会からの紹介で、財団法人屋久島環境文化財団の屋久島研究講座として、屋久島の地質の紹介が実現した。さらに鹿児島県立屋久島高校の環境コースの先生との打ち合わせから、屋久島高校の環境コース公開講座として屋久島の地質の紹介を行うこととなった。

11月15日（土）に屋久島町宮之浦にある環境文化村センター大ホールで研究講座が開催された。屋久島環境文化財団は事前にポスターを作成し、屋久島内の主要な場所に掲示していただいた。また講演会の1週間前には島内の約3千戸に新聞の折込チラシを配布し、さらに当日は町内の放送で案内をしていただいた。研究講座は午後7時から9時まで行われた。土曜日の夜という時間ではあったが、100人を超える方の参加があった。講演会でははじめに小笠原が産総研地質調査総合センターの紹介、屋久島の地質学的な位置と屋久島における地質調査の歴史の紹介を行い（写真1）、次に斎藤が地質図の解説と四万十帯古第三紀付加体の説明を行った。続いて小笠原が屋久島花崗岩と鉱物資源について紹介し、最後に下司が屋久島の幸屋火砕流堆積物と口永良部島火山について説明した。講演後、質疑応答の時間が取られ、活発な質問が出された。今回多くの参加者から最新の地質の知見を得ることが出来たと評価していただいたが、一部専門用語や内容が難しかったとの意見もあり、より簡明な説明の必要性を実感した。また、講演会には屋久島でガイドをされている方々の参加も多く、今後我々の作った地質情報を、屋久島の自然のバックグラウンドとして、一般の観光客の方々に分かりやすく説明してくださるものと思う。

11月17日（月）には屋久島高校で午前10時55分から12時45分まで、2時限分を使用して公開講座を行なった。環境コースやその他のコースの生徒27人、さらに父兄や先生等17人が教室に集まり、興味深く聞いていただいた。

講演内容は15日の研究講座より噛み砕いたものとした。また会場が教室ということもあり、生徒さんとの距離が近いことから（写真2）、地質調査で使用している道具の紹介、エキジョッカーによる液状化の紹介、幸屋火砕流堆積物の軽石を水槽に浮かべるなど、より地質を体感できる内容とした。

今回、屋久島において20万分の1地質図「屋久島」の成果を紹介する機会があり、地質図情報のアウトリーチについて一つの形の試行ができた。今回お会いした多くの方々から、今度屋久島を訪問するときはまた講演をお願いしますとの声をかけていただき、今後とも地質の簡明な解説の機会を考えていきたいと感じた。



写真1 屋久島環境文化村センター大ホールでの講演。



写真2 鹿児島県立屋久島高等学校での公開講座。幸屋火砕流の軽石の説明。

第7回地圏資源環境研究部門成果報告会 開催報告

宮越 昭暢 (地圏資源環境研究部門)

第7回地圏資源環境研究部門成果報告会が、平成20年11月20日(木)午後秋葉原コンベンションホールで開催されました。「持続可能な社会を目指す地圏資源研究—環境を意識したアプローチ—」をテーマに、5件の講演と27件のポスター発表が行われました。参加者は141名であり、当部門外から92名の御参加を頂きました。

矢野雄策研究部門長より、当部門のミッション「資源の安定供給・地圏環境の利用・地圏環境の保全」と7つの重点研究課題が示されました。報告会テーマに関連して、地圏環境評価システム(GERAS-3)、関東天然ガスの賦存量評価およびCO₂地中貯留に関する進捗状況と年次展開が紹介され、当部門が資源開発研究と環境評価研究を複合的に推進していることが示されました。

次に、丸井敦尚地下水研究グループ長が「持続可能な地下水利用と環境の維持」について講演を行いました。「水文環境図」の紹介と我国における地下水管理の現状、CCOPを通じたアジア各国との連携の成果が報告されました。坂田将地圏微生物研究グループ長は「地下微生物の天然ガス生成ポテンシャル」について講演を行いました。開発を推進している地下微生物の天然ガス生成ポテンシャル評価手法の有用性と適用事例が紹介されました。村岡洋文地熱資源研究グループ長は「再評価されつつある地熱開発ニーズに応じて」として講演を行いました。我国は世界の三大地熱資源大国であり、「日本の熱水系アトラス」(2007)および「全国地熱ポテンシャルマップ」(2008)を活用して更に詳細な地熱資源量評価が可能となることが紹介されました。渡辺 寧鉍物資源グループ長は「鉍物資源研究グループの希土類資源調査の現状」について講演を行いました。東南アジア各国での調査結果から明らかとなった有望地域の存在に加えて、新希土類鉍物「wakefieldite-(Nd)」

を発見したことが併せて報告されました。

招待講演として、佐藤光三東京大学エネルギー・資源フロンティアセンター教授に「持続型炭素循環システム」について講演して頂きました。二酸化炭素の過剰排出問題の自然調和的な解決策である持続型炭素循環システムは、二酸化炭素を大規模排出源で分離回収して地中貯留層に隔離後、微生物群を活用してメタンに変換しエネルギー源として再利用するものです。システム構築には、資源開発と環境評価の研究が有機的に連携することが重要であり、これらに関する研究グループを要する当部門の果たすべき役割を再認識することができました。

すべての講演および17件のポスター発表に関しては、「Green Report 2008」(A4版72ページ)に要旨が収録されています。残部が若干ありますので、ご希望の方は当部門ホームページ(<http://unit.aist.go.jp/georesenv/>)よりお申し込み下さい。



写真 会場の様子。

つくば科学フェスティバル2008出展報告

澤田 結基 (地質標本館), 利光 誠一・兼子 尚知 (地質情報研究部門),
古谷 美智明・兼子 紗知・吉田 朋弘・宮内 渉 (地質標本館)

「つくば科学フェスティバル」はつくば市内の学校や研究機関の出展を集めた科学イベントで、毎年秋に行われています。今年は、つくば市内のイベントホール「つくばカピオ」を会場として、11月8・9日の2日間にわたって開催されました。来場者数は2日間で16,000人(主催者発表)と、昨年の12,600人を大きく上回りました。今回、ノーベル物理学賞を受賞された小林 誠先生(高エネルギー加

速研究機構名誉教授)の講演が急遽企画されたことが、入場者数の増加につながったのかもしれませんが、余談ながら、9日には麻生太郎内閣総理大臣の会場見学もありました。

地質標本館では、今年も「化石のキャストを作ろう」のブースを出展しました。今年は、つくば市事業「第23回国民文化祭・いばらき2008」の一環となったことと、出展数が年々増え続けている影響とで、私たちのブースは

外の広場に設置されたテントとなりました。出展した2日間とも曇り空で寒く（最高気温：8日14.3℃，9日10.7℃），客足を心配しましたが，ふたを開けてみると2日間で延べ276名（8日123名，9日153名）と多くの参加がありました。科学フェスティバル全体の入場者数が多かったのが一因かもしれません。しかし，来客を増やした最大の理由は，寒い中でも明るく対応してくれた博物館実習生の笑顔と，楽しそうに作業する子供たちの姿だったに違いありません。

「化石のキャストを作ろう」では，まず，お湯で軟らかくなる「おゆまる」というプラスチックを使って化石の型をとります。深鍋型のホットプレートでゆでられて軟らかくなった「おゆまる」を，アンモナイトあるいは腕足類の化石にしっかりと押しつけて型取りします。これに水をつけた紙ナプキンをあてて冷やし固めると，化石のモールド（凹型）ができます。このモールドに石膏を流し込んで固めると，化石のキャスト（凸型模型）が完成します。石膏が固まるまでの約5分間を利用して，フリップなどを使って作成した化石について説明します。

今回は，地質標本館で受け入れた博物館実習生として，茨城大学，千葉大学，川村学園女子大学から合計8名が参加

しました。実習生は一連の作業を事前に練習していましたが，出だしではやや緊張しているように見受けられました。しかし，対応をこなすうちに顔には自信がみなぎり，2日目には，子どものペースに合わせて作業を進めるようになっていました。できあがった化石のモールドとキャストを嬉しそうに持ち帰る子どもたちの笑顔もさることながら，解説者として成長していく実習生の姿に接することができたのも，今回の出展の大きな成果だと感じました。



写真 そろそろ固まったかな？

平成20年度埼玉県地震対策セミナー

吉川 敏之（地質調査情報センター）

埼玉県の主催による平成20年度埼玉県地震対策セミナーが，11月28日にさいたま市の埼玉会館で開催されました。地質調査総合センター（GSJ）では，昨年度に引き続いてホワイトでのポスター展示及び販売ブースに協力し，研究者による解説を行いました。主催者の話では，セミナーには約370名の参加があったそうで，昨年度同様に盛況でした。GSJのブースでも，各ポスターをチェックされる熱心な方もおり，用意したパンフレットもほぼ配り終えました。ポスター説明のためのコアタイムが，充分確保されず，満足な説明ができなかったのが残念でした。一方で，自治体とのパイプを維持すると共に，地球科学と社会の接点を実感することができたのは収穫かと思います。出展・販売にご協力いただいた皆様に御礼申し上げます。

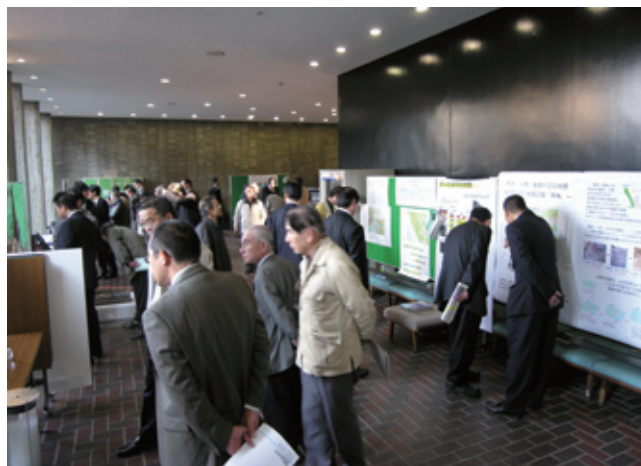


写真 会場の様子。

I*Yシンポジウム「IGYから50年－最新情報技術と地球・太陽科学－」

宮崎 光旗（地質調査情報センター）

産業技術総合研究所つくばセンター共用講堂で、この11月10日（月）から13日（木）にかけて、国際シンポジウム「IGYから50年－最新情報技術と地球・太陽科学－」が催されました。本シンポジウムは、1957-1958年にかけて実施された国際地球観測年（IGY: International Geophysical Year）から50年を記念して、国際惑星地球年（IYPE: 2007-2009）、国際デジタル地球年（eGY: 2007-2008）、国際極年（IPY: 2007-2009）、国際太陽系観測年（IHY: 2007-2009）の地球に関連する4つの国際年（総称してI*Y）の国内委員会が中心となって、地球科学、情報工学、およびその関連分野の研究者・技術者が一堂に会して、地球内部から太陽にいたる壮大な時間と空間にまたがる多様で膨大な観測情報をどのように取り扱い知識を深めてきたか、また現在何を目標しているかなど、最新の成果と今後の研究計画について意見を交換し、IGY以降50年の成果を踏まえた研究のさらなる発展を展望する場として開催されたものです。

第1日10時から始まったオープニング・セッションでは、河野 長シンポジウム組織委員長による開会挨拶と大山真未日本学術振興会国際事業部長の歓迎挨拶に引き続き、シンポジウムの核となる3つの基調講演、吉川弘之産業技術総合研究所理事長（ユネスコ国内委員会会長、国連大学協力会理事長）による「社会の中の科学者」、喜連川 優東京大学大学院情報理工学系研究科教授による「情報爆発時代に向けた地球環境情報のための情報融合炉」、そしてD. J. カールソン IPY 国際計画事務局長による「IGYから50年：科学技術、挑戦の時代」が行われました。続くセッションでは各国際年代表による講演が行われ、IYPEに関してはE. マルダー IYPE 事務局長とW.F. エダー欧州代表 IYPE 理事の連名による「IGYから50年：世界各国で支持された地球科学」がエダー氏により発表さ

れました。第2日から第4日午前までの2日半にかけては、地球科学、太陽・宇宙空間科学、情報科学あるいは工学の、幅広い分野からの発表が行われました。発表件数は口頭発表55件、ポスター発表70件に上りました。第3日夕刻に催されたバンケットでは、鈴木興太郎日本学術会議副会長の挨拶に続いて、小玉喜三郎 IYPE 日本会長（産業技術総合研究所特別顧問）が日本における IYPE 代表として、また開催地を代表して歓迎の挨拶を行いました。第4日最終日の昼には総括セッションが持たれ、シンポジウム参加者の総意のもと、地球・太陽科学としての持続可能な地球社会実現のための目標設定と活動、さらに地球と宇宙に関する情報と知見の人類社会における共有を謳った「つくば宣言」がまとめられました。シンポジウム参加者は160名（うち海外からは40名）と9団体でした。

本シンポジウムの運営に関しては、産総研の多くの職員の方々に、会場設営をはじめ巡検案内やセッション司会など、協力していただきました。この場をお借りして感謝いたします。



写真 会場となった産総研つくばセンター共用講堂前のオープンデッキでの記念写真。

UNGIWG9 Open Day 参加報告

川畑 大作（地質調査情報センター）

2008年11月4日から7日にかけて UNGIWG (United Nations Geographic Information Working Group) の会合がウィーン（オーストリア）の VIC (Vienna International Center) で行われた。産業技術総合研究所は正式な UNGIWG メンバーではないため、Open Day の6日～7日午前のセッションにオブザーバ参加した。各国から60～70人ほど参加し、日本の組織としては産業技術総合研究所だけの参加であった。

6日午前には議長の挨拶、参加者の自己紹介の後、SDI (Spatial Data Infrastructure) 対 Neogeography というテーマでプレゼンテーションと議論が行われた。空間データのメタデータに対して明確な定義を決め、主に Web-GIS を核にしたシステムを構築し、普及と共有を目指す SDI の構想に対し、明確なメタデータの定義を持たなくても、全文検索などのデータそのものに対する検索などでフォローし、シンプルな空間情報流通の仕組みを提案する Google

などに代表される新しい潮流を Neogeography として、これらの今後について活発な議論が繰り広げられた。

6日午後には、Open Data と FOSS (Free and Open Source Software) というテーマで、取得自体にはコストのかからないデータと、主に Web-GIS プラットフォームに関するプレゼンテーションと議論が行われた。主にフリーで取得できる衛星情報の話題、Wiki を利用して世界の道路地図をユーザーが作り上げていく仕組み、Mapserver などのオープンソースソフトウェアを用いたシステム構築の話などが多かった。

7日午前には、各機関や企業が現在開発しているデータベースや Web-GIS プラットフォーム、製品群に関するプレゼンテーションと質疑応答があった。ワーキンググループの会合には参加できなかったが、参加国のプレゼンテーションを見る限り、UNGIWG はこれまで Web-GIS やメタデータの定義など、日本の多くの機関で行われていることと同じような活動をしているようではあるが、Open Day の議論では、主にインフラ整備や新しい情報技術のサイク

ルの情報収集や議論に終始していた。情報技術の栄枯盛衰のサイクルは非常に短く、我々も常に注意を払いつつ情報収集を行い今後の動向に対して迅速に対応する必要性を強く感じた。



写真 会場の様子。

「公開地質地盤情報データベースの活用と将来展望」報告

古宇田 亮一 (産学官連携推進部門)

2008年11月21日午後に國學院大學渋谷キャンパスの学術メディアセンター・常磐松ホールにて、見出しの会合が開催された。主催は日本情報地質学会で、共催は産総研の他、地質地盤情報協議会(産総研コンソーシアム)、産技連(知的基盤と環境エネルギーの各部会)、土木研、地質学会、全地連、NPO法人地質情報整備・活用機構が名を連ねた。会場が200名収容の広いところだったので、65名の参加者にはゆとりがあった。産総研からも10名以上の出席者があった。

シンポジウムの講演内容(括弧内は所属と名前)は下記の通りであり、産総研から脇田・古宇田・加藤の3名がプレゼンテーションを行った。

- ・基調講演「地盤情報の公開について」(東京大学生産技術研究所 小長井一男)
- ・「国土地盤情報検索サイト開始と地盤情報公開と展望」(土木研究所・倉橋稔幸)
- ・「産総研における地質情報の整備と発信」(産業技術総合研究所・脇田浩二)
- ・「公開地質地盤情報データベースの活用」(全国地質調査業協会連合会・中田文雄)
- ・「自治体における公開地盤情報の活用と展望」(埼玉県環境科学国際センター・八戸昭一)
- ・「公開地盤情報のシステムインテグレーション構築の

課題と展望」(基礎地盤コンサルタンツ・若林真由美)
・「世界の地質地盤情報公開の動向と展望」(産業技術総合研究所・古宇田亮一)

総合討論

「今後への展望」(産業技術総合研究所・加藤碩一)

このシンポジウムの趣旨は、次の通りである；

「情報技術の向上により、現在、多様な地質地盤情報データベースがネットワーク公開され利用できる。ネットワーク公開に至らなくても、内部データベースの進歩で、印刷も含む様々な利用メディアにより、地下の情報ソースへのアクセスが著しく向上している。これは、地盤の安全性を確保し、様々な公共工事や建設、地震等の防災や環境事業、地下利用等に貴重なインフラストラクチャを提供している。特に、今年になって国レベルで国土地盤情報検索サイトが公開された意義は大きい(<http://www.kunijiban.pwri.go.jp/>；英語版もあり)。その利用・活用については、公開スピードに対応して長足の進歩を遂げているとは必ずしも言い難いのが現状であろう。しかし、活用事例は徐々に増加しつつある。そこで、ボーリングや地図・地質図データ、地学的データ、関連データなど多様な地質地盤情報をめぐる現状を回顧し、地震防災を始めとした様々な利活用と、今後の全国レベルでのデータベースの更なる促進に向けて将来を展望するため、本シンポジウムを開催した。」

スケジュール

12月20~21日

産総研きやらばん2008TOKYO (東京、科学技術館)
http://www.aist.go.jp/aist_j/event/ev2008/ev20081220/tokyo_c/index.html

12月26日

サイエンスカフェ「温泉と金鉱脈を結ぶ赤い糸」
(つくば)
http://www.aist.go.jp/aist_j/event/ev2008/ev20081226/ev20081226.html

12月16~^{2009年}3月1日

地質標本館特別展
地質情報展 2008 あきた「発見・体験!地球からのおくりもの」
http://www.gsj.jp/Muse/eve_care/2008/akita/index.html

2月4~6日

第3回GEOSSアジア太平洋シンポジウム (京都)
<http://www.prime-intl.co.jp/geoss/>

2月5~6日

第13回「震災対策技術展/自然災害対策技術展」横浜
<http://www.exhibitiontech.com/etec/index.html>

2月20日

日本ジオパーク記念式典

2月26日

地質調査総合センター第13回シンポジウム
「海域・沿岸域の資源・環境・防災-持続的発展に向けた海洋地質研究-」
(東京、秋葉原ダイビル コンベンションホール)

地質と地盤に関するデータベースは、一般には紙に印刷された出版物や、電子化されても有料のDVD-ROMや有料WEBサイトでしか得られず、普及も進んでいなかった。このため、「地質情報は使いにくいだけでなく、入手しにくい」という評判が確立したきらいがある。ところが、今年3月に国土交通省から公開された「KuniJiban」データベースはwebサイトから無料でダウンロードでき、そのまま使っても、ビジネスに使っても構わないという、画期的な公開方法をとっている。これを大いに活用して地質情報の有用性を世の中に普及していただければと願う意見が多く出された。

今後の急速な普及と、地盤情報整備の一層の進展を望みたい。



「地質の日」ロゴ決定!

「地質の日」のロゴとポスター募集が、「地質の日」事業推進委員会によって行われました。事業推進委員会での選考の結果、彦根 正さん(東京都)の作品がロゴとして選ばれました。ロゴは、Geology Dayの「G」をベースに、重なる「地層」を組み合わせ、「地質の日」の広がりを表現しています。事業推進委員会ではこのロゴを使い、「地質の日」を盛り上げていきます。

<http://www.gsj.jp/geologyday/>

編集後記

原 英俊 (地質調査情報センター)

11月下旬に起きたデモ隊によるタイ国際空港の閉鎖では、何名かのGSJ関係者が巻き込まれました。ちょうど私もバンコクにて、チュラロンコン大学地学教室創立50周年記念シンポジウムとIGCP516との共同シンポジウム(11月24~26日)に参加していました。シンポジウム開催中に空港が閉鎖されたのですが、タイ人関係者からはすぐ収まるとの声を聞き、空港閉鎖直後は楽観視していました。ところが思ったより閉鎖が長引き、結局帰国が3日ほど延びてしまいました。臨時便のチケット手配や臨時空港でのチェックインは、非常に混乱しておりました。争奪戦です。私の場合、タイの友人のサポートがあったので、あまり混乱に巻き込まれずすみましたが...一方、バンコク市内では、デモの影響はなく、平常時と何ら変わらない状況でした。本当に空港でデモが行われているのが疑いたくなるほどです。ただ黄色いシャツと赤いシャツを着て外出すると言われていました。黄色は反政府団体、赤は政府支持団体の象徴です。デモ行動によって帰国が延びてしまったのは大変でしたが、軍事クーデターなどを伴わない、タイらしい危険の少ない決着方法がまたとられたことは幸いでした。これまで地質調査などで、タイにはよく訪れていました。今回のことで、タイが危険な国と思われ、調査に行きづらくなってしまわないか心配してしまいます。まずは安全第一ですが、今回のことに懲りず、またタイには行くつもりです。長々と編集後記を書いて失礼しました。今年ももうすぐ終わりです。それでは皆さま、良いお年をお迎え下さい。

GSJ Newsletter No.51 2008/12

発行日: 2008年12月22日
発行: 独立行政法人産業技術総合研究所 地質調査総合センター
編集: 独立行政法人産業技術総合研究所 地質調査情報センター
協田 浩二 (編集長)
原 英俊 (編集担当)
志摩 あかね (デザイン・レイアウト)

GSJ ニュースレターは、バックナンバーも含めて、地質調査総合センターホームページでご覧になれます。

- 地質調査総合センターホームページ: <http://www.gsj.jp/>
- GSJ Newsletter のページ: <http://www.gsj.jp/gsjnl/index.html>

〒305-8567 茨城県つくば市東1-1-1 中央第7
TEL:029-861-3687 / FAX:029-861-3672